

市民の手で文化のみえるまちづくり

姫路文連 ニュース

季刊 2014年 秋号

編集・発行

姫路地方文化団体連合協議会
(姫路文連)事務局

〒670-0935

姫路市北条口3丁目5

みどりビル1F (姫路労音内)

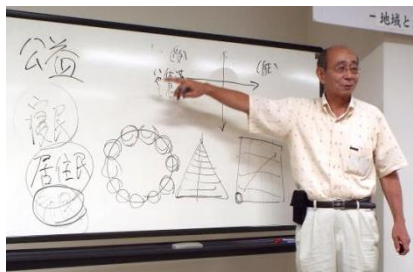
姫路地方文化団体連合協議会会報(第42号)



稲こき 森崎伯霊 (1899年~1992年)

茶座「いま・はりま」 地域と文化—明日への発信—

2006年にスタートした連続講座「茶座」は、今年9年目をむかえるとともに、文連の創立50周年という節目に当たることから、遠方からも講師をお招きして、地域の文化のあり方について考えるシリーズとした。



第1回は7月15日、前・帝塚山大学教授の中川幾郎氏による「地域・地方の文化行政」と題した辛口の講演。昨今の大阪府・大阪市において橋下徹氏が主唱した、文化に対する無理解によるものととれる施策の見直しに対して文化条例の存在が防波堤となった例や、自身の出身地である豊中市から多くの著名な文化人を輩出したことなどを話におりませながら、文化は国民のもつ当然の権利であり人権であるという踏み込んだとらえ方に感銘を

あたえられた。

第2回は8月4日、神戸大学教授の藤野一夫氏による「ヨーロッパ(ドイツを中心にして)の文化政策」がテーマ。日独における文化のとらえられ方の比較し、日本では文化が市場経済的条件に深く左右されているのに対し、ドイツでは手厚い公的補助などにより文化が安定的に自立していること、また制度的にも若い人たちが安価に鑑賞できる仕組みが整えられていることなどを



例としてあげるほか、旧東ドイツの文化政策が東西統一過程において及ぼした影響や、首都ベルリンにおいてクリエイターたちによる新しい文化的創造が活発に行われている状況についてなど、興味深い講演であった。

第3回は9月14日、いわき芸術文化交流会館「アリオス」支配人の大石時雄氏による「市民の立場に立った公共施設のあり方、アリオスの活動を通して」。少子高齢化がすすむなか将来的に各地のホールを支える人材が絶対的に不足することは確実であり憂慮すべきことであるとの見通しに立ち、次の世代を担う地元の若者を採用して育成する仕組みをつくることに積極的に取り組んでいること、たとえば地元の高校生に館内放送をまかせている事例など、多くのヒントが得られた。



第4回は10月19日、地元出身の劇作家・鄭義信氏に「舞台芸術と文化施設」と題して話していただいた。ほとんど最初から鄭さんのバイオグラフィー、舞台や映画作品についてごちゃまぜの質疑応答的なフリートークとなり、しかも聴衆からの質問がしばしば途切れがちになったため、司会進行役にとってはむずかしい二時間となったが、そんななかで現場から見た使い勝手のよいホールとはどのようなものかという、今後の姫路にとって参考になる話もあった。終了後は焼き肉店での、兵庫県劇団協議会合同公演『ピンバウエディング』出演者もまじえた懇親の場で話がつづいた。



(千田草介)

新文化センター建設に向けて

昨年11月に始まった「イベントゾーン基本計画検討懇話会」も、現在までに4回の会議を重ね、姫路の街の新しい顔となるイベントゾーンの姿が少しずつ見えてきました。もちろんまだ素案の段階ですので、変更の可能性はありますが、現時点での議論の進行状況を簡単に報告したいと思います。

まず、イベントゾーンの概要ですが、場所はJR姫路駅から東に約700m、山陽本線と播但線に挟まれた、現在は空き地と住宅展示場になっている約6.6haの地域です。そこに文化の交流拠点（新文化センター）、会議・コンベンション施設、そして高等教育・研究機能を有する施設を建設し、都心部の「交流」の核にしようという姫路の未来を見据えた壮大な計画です。

新文化センターの移転新設については、その理由として、現建物全体の老朽化は勿論のこと、設計の古さからバリアフリー未対応であること、自動車での来館が前提の立地などが挙げられ、高齢化社会を迎える中で、幅広い層の市民が利用する施設としては多数の問題がありました。そのため、数年前より定期的に使用している芸術・文化団体を中心に、駅周辺への移転新設が要望されていましたが、この度の建設計画によって念願がかなうこととなります。

ホールの規模については、まだ基本計画の段階ですが、大（1600～2000席程度）、中（800席程度）、小（100席程度）の3つのホールと、リハーサル室、練習室が計画されています。計画通りに完成すると、音楽・演劇公演、講演会、小規模発表会などをより充実した環境で行なうことが出来ます。

しかし、いくら素晴らしいホールが完成してもソフト面が充実しなければ、文化豊かなまちづくりを実現することは出来ません。姫路のホールは、他都市のホールと比較しても利用率が非常に高く、またその利用者も市民中心なのが特徴です。つまりソフト面を充実させるのは、わたしたち自身の役目であり、姫路文連並びに各芸術・文化団体の責任は重大だといえます。

本年8月から、姫路市の文化政策の方向性と、文化施設の運用方針等の基本となる「文化芸術振興ビジョン」の策定作業が始まりました。姫路市当局も都市の発展には文化・芸術が欠かせないものだとすることを強く認識しています。官民それぞれの立場に違いはあっても、文化豊かなまちづくりに向かって、より一層の協力をしていきましょう（加茂田陽一）

神戸新聞社との交流会

神戸新聞社と姫路文連の懇親会が、8月20日魚町の新北京で開かれました。毎年の恒例行事となり、お酒を酌み交わしながらの和やかな懇親会となりました。記者さんは、転勤族なので毎年新しい出会いがあり、日頃の新聞造りのご苦労と、文連会員の活動や駅前再開発、特に文化センターの建て替え計画などなど、情報を交換しました。姫路城の平成の大修理も、来年3月27日完成します、白亜の白鷺城が4年振りに姿を現し、姫路ゆかりの大河ドラマ「軍師官兵衛」の放映で賑わっていますが、日常の取材や文化、芸術の取組みなどなど、食事しながら交歓しました、23名の参加でもりあがりました。

（松本英治）

防災講座「阪神淡路大震災、東日本大震災を知る」

ひょうご防災特別推進員
防災士 佐藤 章

(平成26年)9月8日(月)午後7時から、姫路市民会館で開催された「防災講座」に講師としてお招きいただきました。その内容と僕がしている活動について少しお話させていただきます。

講座の最初は、阪神淡路大震災の時の状況を自分の体験を交えてお話しました。僕は神戸に生まれ育ち、阪神淡路大震災の時は中学2年生でした。震度7の揺れは今でも忘れられない身体と心を揺さぶる大きな衝撃でした。被災当時はボランティア活動等何もできなくて、電気・ガス・水道・ライフラインが復旧しない中でただ家族が生きのびる事を考えていた当時に講座に来て下さった方々と一緒に神戸の写真と共にふりかえりました。

阪神・淡路大震災は、当時約350万人が密集する、経済活動が盛んな都市で起こった直下型の大地震でした。まちなみや人々の心に与えた影響はもちろん、都市の機能や産業面にも大きなダメージをもたらしましたが、この震災を通して多くの学びがあったことも事実です。

阪神淡路大震災が発生した1995年は、多くのボランティアが神戸を訪れ、それぞれの活動がNPO(特定非営利活動法人)に発展するなど「ボランティア元年」と呼ばれました。また、仮設住宅では、社会的弱者といわれる方々の入居が優先的に進められ、その結果、コミュニティの衰退や孤独死の問題など多くの課題が生じてしまったのです。東北ではその経験が活(い)



かされて、コミュニティ(地域・地区)単位での入居が考案されました。



現在、神戸市民の約4割が阪神淡路大震災を経験していないと言われています。その中で阪神淡路大震災を経験した私達が震災を経験していない方々と一緒になって震災の記憶を伝え、考え、共有する機会として今回の防災講座の自分自身のテーマを「くらしの視点から防災を見つめる」事としました。

(写真は被災当時と現在の生田新道)

姫路文連創立50周年

故黒川録朗氏御子息よりお祝い

1月6日、姫路文連50周年のお祝いとして、初代会長・黒川録朗さんのご子息・黒川良平さん、寺西喜代さん、片嶋直美さんより50万円のお祝いを頂きました。心から感謝し、皆様にご報告申し上げます。

姫路文連では、今年度の事業をを**姫路文連創立50周年記念事業**と位置付け、より充実した活動を目指しています。今後、「26年度姫路文化賞受賞式」、「第3回東日本大震災復興支援文化展“連”(3/2~3/15・3/17~29 ルネッサンススクエア)、先人の方々を偲ぶ冊子の製作などを予定しております。ますますのご支援、よろしく願いいたします。

今 思うこと



『魔界の住人 川端康成』を刊行して

——川端康成と伊藤初代と三明永無——

森本 穂 (おさむ)

このほど、私は『魔界の住人 川端康成 その生涯と文学』（勉誠出版）を刊行した。康成が生まれ落ちてから亡くなるまでの72年間を描き、たどったものである。

『文芸日女道』の二〇〇八年九月号から一二年一二月号まで、五十二ヶ月、四年半、連載した原稿を加筆削除、さらに四度の校正と推敲を加えて成ったものだ。

当然ながら、康成の青春に大きな影を落とした「運命のひと」伊藤初代との経緯も、くわしく記した。康成の内部において、初代の像は、少なくとも大正8年（一九一九）の出会いから、昭和40年（一九六五）、紀行文「水郷」発表まで、46年間の長きにわたって残影していた。

二人が出会ったのは、大正8年、一高三年生だった康成、三明永無（みあけ えいむ）ら四人の、寮で同室の仲間が、学校近くのカフェ・エランに通いはじめた時であった。

エランは小さな質素な店だったが、数え14歳の少女・初代が可憐で、彼女と話したり歌ったりするために、四人は毎夜のようにこの店に通いつづけたのだ。伊藤初代はこの店の人気者だった。

翌年、エランのマダムは恋人と結婚するため台湾に行くことになり、店を閉じた。わが娘同様に可愛がっていた初代を、マダムは、自分の姉が嫁いでいる岐阜市の寺の住職夫妻に、養女のような形で、あずけた。

その岐阜へ、康成は、三明永無に伴われて二度行った。大正10年（一九二一年）秋——今から93年前のことである。

二度目の時、三明永無は初代を説いて、康成と結婚せよと言った。初代はうなずいた。こうして、数え23歳の康成と16歳の二人の婚約が成立した。

その夜、長良川に面した宿の二階から、三人は、鶉飼（うがい）のかがり火を見た。そのことが「篝火」という小説に描かれている。翌日、三人は、瀬古写真館で記念撮影した。これが今日も残る、貴重な三人の映像だ。日本近代文学史上、永遠に残される写真となるだろう。

東京に帰った康成と初代の間で、熱い愛の手紙が交換されたが、やがて「非常」の手紙によって、一方的に愛は破れた。その傷痕が、かえって康成を作家に成長させたのである。